

大象に対する王弼易学の態度について Ⅲ

西川 靖 二

▼キーワード

大象
卦象
象傳
卦義

▼要旨

王弼易学は、象傳が卦象より卦徳を重んじる傾向にあるのに従い、卦義を論じる際に卦象を輕視しているといえる。それは、『周易略例』明象における「忘象得意」の主張に典型的に見える卦象輕視の基本的姿勢が具体化されたものであろう。だが、大象は卦象を以て卦義を論じることが重視されている。そしてこの大象は象傳の次に位置しており卦義を論じる際に依拠すべき存在である。卦象を輕視する王弼はこの大象にどのように対応しているのであろうか。本稿は、王弼の大象に対する基本的態度が、卦象輕視と同時に大象の議論を象傳の議論の中に取り込んでしまうことであったことを、六十四卦を分析することによって論じたものである。分量の都合から、このⅢではⅠとⅡで分析したもの以外の二十四卦について検討した。

十 需・頤・明夷・屯・離・睽・革・鼎・未濟

この第十章では、戸田氏が「《カ》義理によつて解説するもの十一卦」として挙げる需・頤・明夷・屯・離・睽・革・鼎・未濟・恆・遯について検討する。戸田氏は恆・遯を除いた九卦しか例に挙げていないが、残った卦から判断して、恆・遯の両卦が補われることになる。しかし、恆・遯の両卦については第五章で既に検討済みであるので、戸田氏が挙げる九卦が検討の対象となる。

戸田氏の判断によると、これら九卦の大象に対する王注は、義理によつて解説するが、上下卦象や上下卦徳や卦名に言及しないという特徴を持つことになる。では、これらの卦において、大象王注と象傳での議論との有意義な関係が見いだしうるのだろうか。以下に順次検討してみよう。

需卦の場合、大象には「雲上於天、需。君子以飲食宴樂」とあり王弼は「童蒙已發、盛德光亨。飲食宴樂、其在茲乎」と注する。戸田氏は「雲上於天の象も、需須也、という象傳の解も援用せず、蒙卦に連絡して巧みに説明している」と評する。たしかに、直前の卦である蒙卦の「童蒙」が需卦においてすでに啓発されていると述べるのは、「蒙卦に連絡して巧みに説明している」ことになる。また、「需須也、という象傳の解も援用せず」というのはその通りである。しかし、象傳の解をまったく援用していないとはいえない。

需卦象傳には「需須也。險在前也。剛健而不陷、其義不困窮矣。需、有孚、光亨、貞吉、位乎天位、以正中也」とある。これは勿論、卦辭「需、有孚、光亨、貞吉」を解釈したものである。象傳王注には「謂五也。位乎天位、用其中正、以待物、需道畢矣。故光亨、貞吉」とある。象傳王注は象傳の後半部分「需、有孚、光亨、貞吉、位乎天位、以正中也」をもつばら解釈しており、前半部分に興味を示していない。つまり王弼は象傳後半部分に関心を寄せていると言える。それゆえに、象傳注で示した態度と同じように、大象王注は象傳前半部の「需須也」という解を援用していないのである。一方、大象王注の「盛德光亨」という表現は、突き詰めれば卦辭の「光亨」と関係するであろうが、象傳後半部分での議論を前提としたものであろう。また、大象王注の「盛德」の内容は、象傳王注の「位乎天位、用其中正、以待物、需道畢矣」という説明を待って具体化するはずである。

さらに、直前の卦である蒙卦に連絡して説明する点では、『序卦傳』には「蒙者、蒙也。物之稚也。物稚不可不養也。故受之以需。需者、飲食之道也」という解釈がある。需卦大象の「飲食宴樂」を蒙卦との連絡で説明するのなら、この『序卦傳』の解釈の方が親和性があるようにも思える。しかし、王弼はこの『序卦傳』の発想を採用しない。裏返せば、「童蒙已發、盛德光亨。飲食宴樂、其在茲乎」という大象王注の説明の仕方は、象傳での議論への王弼のこだわりを示していると言えよう。

頤卦の場合、大象には「山下有雷、頤。君子以慎言語、節飲食」とあり、王弼は「言語飲食、猶慎而節之。而況其餘乎」と注する。戸田氏は、大象の「君子以慎言語、節飲食、とあるのを進一步せしめた解である」と評す。その通りである。象傳は「頤、貞吉、養正則吉也。觀頤、觀其所養也。自求口實、觀其自養也。天地養萬物、聖人養賢、以及萬民。頤之時大矣哉」と述べる。王弼は卦辭・象傳に注を一切施していない。一見すると、大象注と象傳との直接的な関係は無いようにも思える。ただ、象傳の中に次の主張を読み取るのは容易であろう。「自ら養うものを観て、それが正しければ、吉である」。そして、「自ら養うもの」の具体的な内容は象傳の「自求口實、觀其自養也」という表現が示している。「自求口實」は卦辭の文。つまり「口実」ということになる。「口実」は様々に解釈しうるが、「飲食・言語」を連想するのはごく自然であろう。とすれば、言語飲食を慎むことを主張する大象後半部の表現は、象傳の議論と連続していると言えよう（「自求口實」は卦辭の言葉である。しかし、卦辭を象傳に従って読もうとする王弼の基本的態度からすれば、「自求口實」という言葉は、象傳の「自求口實、觀其自養也」という言葉と直結するはずである）。それゆえに王弼は、大象の「君子以慎言語、節飲食、とあるのを進一步せしめた」だけで事足りたのではなからうか。少なくとも、大象・大象王注と象傳との間に顕著な矛盾を見いだすことは困難であろう。

明夷卦の場合、大象は「明入地中、明夷、君子以莅衆、用晦而明」と述べ、王弼は「莅衆顯明、蔽僞百姓者也。故以蒙養正、以明夷莅衆。藏明於内、乃得明也。顯明於外、乃所辟也」と注する。戸田氏は「藏明於内、乃得明也。顯明於外、乃所辟也」と注しているのは、象傳の利艱貞、晦其明也、に本づいたのであろうが、用晦而明、という本文の意は、むしろ中庸に、闇然而日章、とあるに同じで、主意は明明徳にあると思う^⑤と評する。象傳には「明入地中、明夷。内文明而外柔順、以蒙大難、文王以之。利艱貞、晦其明也、内難而能正其志、箕子以之」とあるが、王弼は一字も注を施さない。戸田氏の指摘の通り、大象王注の「藏明於内、乃得明也。顯明於外、乃所辟也」という表現は象傳「利艱貞、晦其明也」を踏まえたものといえよう。

ただ、戸田氏の言及しない大象王注前半部に注目すると「以蒙養正」とある。この明夷卦象傳に見える「以蒙大難」の「蒙」は「こうむる」

の意味であろうから、「以蒙養正」の「蒙」は「以蒙大難」の「蒙」とは、直接的には関係しない。この「以蒙養正」という表現は蒙卦の象傳「蒙以養正、聖功也」を踏まえている。さらに、蒙卦卦辭注において王弼はこの蒙卦象傳の文章を用いて「蒙之所利、乃利正也。夫明莫若聖、昧莫若蒙。蒙以養正、乃聖功也。然則養正以明、失其道矣」と論じている。「蒙」を用いることが良いのであって「明」を用いるのは良くない」という、この蒙卦での王弼の議論は、明夷卦大象王注の「故以蒙養正、以明夷莅衆。藏明於内、乃得明也。顯明於外、乃所辟也」という議論と呼応している。明夷卦大象注の議論は、蒙卦象傳と象傳を踏まえた卦辭王注との議論を前提としているはずである。そうだとすれば、王弼は明夷卦大象を解釈するのにわざわざ別の卦の象傳の議論を利用していることになる。ここには別の卦の象傳での議論を利用してまでも、象傳レベルの議論に固執して大象を解釈しようとしている王弼の姿勢が見えて来るであろう。

残りの屯・離・睽・革・鼎・未濟の六卦について、戸田氏は「訓詁義理の説明を加えているのみ」と評する。

屯卦の場合、大象は「雲雷、屯。君子以經綸」と述べ、王弼は「君子經綸之時」とのみ注する。王注は大象の表現を繰り返しているに過ぎないとも言える。しかし、わざわざ「時」を添加しているのだから、王弼は「時」の概念に注意を寄せていると言えよう。この卦の象傳には、大象王注の表現と直接関係する表現は存在しない。勿論「時」の字も存在しない。ただ、象傳王注に「屯者、天地造始之時也……處造始之時、所宜之善、莫善建侯也」とあり、「時」という概念に関心を寄せている。「時」の概念で説明しようという点では、この卦の大象王注と象傳王注は共通している。

そして、卦を「時」で説明しようとするのは、象傳一般の特徴であって大象一般の特徴ではない。とすれば、大象王注の「君子經綸之時」という表現は、屯卦象傳での議論の影響を受けていると言えよう。象傳王注の「處造始之時、所宜之善、莫善建侯也」の「時」と大象王注の「君子經綸之時」の「時」とは矛盾なく繋がるはずである。少なくとも、王弼は「時」を問題にするというこの象傳的思考を前提として、屯卦大象後半部を解釈しようとしていると言えるであろう。

離卦の場合、大象には「明兩作、離。大人以繼明照于四方」とあり、王弼は「繼、謂不絶也。明照相繼、不絶曠也」と述べる。王弼は大象の表現に即して忠実に解釈しているといえる。しかし、この卦の大象の「明兩作、離」という表現は、大象一般の特徴とされる卦象による卦の解釈とは言い難い。「明」は經卦離の卦徳であろう。象傳には「離麗也。日月麗乎天、百穀草木麗乎土。重明以麗乎正、乃化成天下。柔麗乎中正、

故事。是以畜牝牛吉也」とあり、上下卦を「重明」と卦徳によって説明している。そもそも大象は、經卦離を同人・大有・賁・家人・睽・革・鼎・旅・既濟・未濟の各卦では「火」とし、噬嗑・豐の両卦では「電」としている。經卦離を「明」という卦徳で説明するのは、離・晉・明夷の三卦においてのみである。そして、離・晉・明夷の三卦では、象傳がそもそも經卦離を卦徳「明」でもって説明している。離・晉・明夷の三卦の大象が經卦離の卦象を卦徳「明」に読み替えているのは、この三卦の大象自体が象傳の解釈に近いと言える。また、離卦象傳の「重明以麗乎正、乃化成天下」という議論と大象の「明兩作、離、大人以繼明照于四方」という議論とは矛盾なく繋がっている。離卦大象王注は、大象を象傳と一体のものと理解してうえで、解釈を施しているといえるのではないか。

睽卦の場合、大象には「上火下澤、睽。君子以同而異」とあり、大象王注は「同於通理、異於職事」と述べる。大象王注は大象後半部の文章に即して解釈しているといえる。一方、象傳には「睽、火動而上、澤動而下。二女同居、其志不同行。說而麗乎明、柔進而上行、得中而應乎剛、是以小事吉。天地睽而其事同也、男女睽而其志通也、萬物睽而其事類也。睽之時用大矣哉」とあり、象傳王注には「事皆相違、害之道也、何由得小事吉、以有此三德也。睽離之時、非小人之所能用也」とある。象傳は「其事同」「其事類」と述べ、「事」は異ならないと言う。また象傳王注の「事皆相違、害之道也」と述べ、「事」が異なることを否定的にとらえている。これは、大象王注の「異於職事」という主張に矛盾するように見える。もしそうならば、睽卦大象注は象傳での議論と対立する議論を展開していることになる。

しかし、象傳王注の「事皆相違、害之道也」は、「睽の時」の一般的傾向を説明したにすぎない。また象傳後半の「天地睽而其事同也、男女睽而其志通也、萬物睽而其事類也」と言う議論の主旨は、「形体面では異なるものも共通点・類似点を持つ」ということであろう。この主旨は、大象王注の「同於通理、異於職事」という議論の主旨と矛盾するところか同じものであると言える。大象の「同而異」という簡単な表現から大象王注の「同於通理、異於職事」と言う議論を導き出すには、やはり飛躍があると言える。象傳の議論を王弼が踏まえているのであると解する方が穏当ではなからうか。

また、象傳の主旨の実行は、誰にでも行えることではない。だから象傳は「睽之時用大矣哉」という言葉で結ばれる。王弼はこの言葉に注して小人には出来ないことを確認している。一方、大象注王弼の「同於通理、異於職事」というのは、「君子」が行うのが大前提である。つまり小人には出来ないのである。この卦の大象王注も、やはり象傳での議論と深く関連していると考えるべきではなからうか。

革卦の場合、大象には「澤中有火、革。君子以治歷明時」とあり、王弼は「歷數時會、存乎變也」と注している。大象注において王弼は上下

卦象には言及しない。「革」を「變」と解して、大象後半を解説している。彖傳は「革、水火相息、二女同居、其志不相得、曰革。已日乃孚、革而信之、文明以說、大亨以正、革而當、其悔乃亡。天地革而四時成、湯武革命、順乎天而應乎人、革之時大矣哉」と述べる。大象王注と彖傳の議論は無関係のように見える。

ただ注意しなければならないのは、彖傳の「水火相息、二女同居、其志不相得、曰革」という表現が「水火」と「二女（少女・中女）」とて卦義を説明している点である。上卦兌の卦象は「澤」であろうが「水」に通じうる。彖傳のこの部分の議論は、上下卦を「少女」「中女」ととらえての議論を含むが、一方では卦象によって解釈していることになり、この点からすれば大象の「澤中有火、革」と深く関連しうると言える。そして、彖傳のこの部分に対して王弼は「凡不合而後乃變、生、變之所生、生於不合者也、故取不合之象以爲革也、息者生變之謂也、火欲上而澤欲下、水火相戰而後生變者也、二女同居而有水火之性、近而不相得也」と注している。王弼は彖傳の「二女（少女・中女）」の概念を「水」と「火」との関係に読み換えて、革卦の卦義「變」を専ら「水火」という上下卦象によって説明していると言えよう。

とすれば、大象注において王弼が卦象に言及しないのは、卦象を無視するからではない。彖傳での上下卦象の議論を前提としているがゆえに、言及する必要がないのである。つまり「澤中有火、革」「水火相息、曰革（＝變）」と解釈した上で、「歷數時會、存乎變也」と論じているのである。この大象王注の「變」は当然のこととして彖傳王注の「變」を踏まえたものであろう。王弼は、彖傳での卦象の議論の中に大象の卦象の議論を読み込んで卦義の「變」を論じ、その上で大象後半部を解釈しているといえよう。つまり、彖傳での議論が大象王注に深く関与している。ただ、王弼が上下卦象を重視しているようにも見えるが、必ずしもそうではなく、王弼は、彖傳が最初に上下卦象を挙げて卦義を説明しようとしている態度に従っているにすぎないと言えよう。

鼎卦の場合、大象には「木上有火、鼎。君子以正位凝命」とあり、王弼は「凝者嚴整之貌也。鼎者、取新成變者也。革去故而鼎成新。正位者、明尊卑之序也。凝命者、以成敎命之嚴也」と注する。王弼は上下卦象に興味を示さないようである。革卦が旧故を變革するときであつたのを承けて、鼎卦は「新」を完成させる時である、という考えが議論の前提である。この前提から大象後半部を王弼は解釈しているといえる。この大象王注の議論の仕方は、卦辭注での議論と深く関連している。卦辭は「鼎、元吉亨」とのみ述べ、これに対して王弼は「革去故而鼎取新。取新而當其人、易故而法制齊明。吉、然後乃亨。故先元吉而後亨也。鼎者、成變之卦也。革既變矣、則制器立法以成之焉。變而无制、亂可待也。法制應時、然後乃吉。賢愚有別、尊卑有序、然後乃亨。故先元吉而後乃亨」と注する。新しい時代に即応した法制を確立し賢愚の別と尊卑の序を

厳密にすることが、革卦に始まった変革を完成させることだとする主張は、大象注の議論をより発展させたようなものである。王弼は鼎卦の卦義を大象後半部の考えに従って解釈しようとしているように見える。では彖傳での議論は無関係なのであるか。

彖傳の一節に「聖人亨、以享上帝、而大亨以養聖賢」とあり、王弼は「亨者鼎之所爲也。革去故而鼎成新、故爲亨飪調和之器也。去故取新、聖賢不可失也。飪孰也。天下莫不用之、而聖人用之、乃上以享上帝、而下以大亨養聖賢也」と注している。彖傳での王弼の議論も「革去故而鼎成新」が前提となっている。この限りでは、彖傳での議論も卦辭・大象での議論と緊密な関係にあると言えよう。ただ、卦辭・大象が問題にしている法令と身分秩序の完成の議論は、彖傳ではなされていないように見える。しかし、彖傳の残りの二節「巽而耳目聰明」「柔進而上行、得中而應乎剛、是以元亨」に対するそれぞれの王注「聖賢獲養、則已不爲而成矣、故巽而耳目聰明也」「謂五也、有斯二德、故能成進而獲大亨也」と先の彖傳王注を合わせ読むならば、王弼の彖傳での議論の主旨は、聖賢を養うことが「成新」の大前提ということになる。卦辭注に言う「取新而當其人（新を取るに際してはその人を得なければならぬ）」の「其人」は「聖賢」のことに他ならないであろう。また、卦辭注の「賢愚有別、尊卑有序」や大象注の「明尊卑之序」という議論は、聖賢を養うことが「成新」の大前提であるという彖傳での議論からの自然な展開であると言えよう。つまり、彖傳での議論が、卦辭・大象での議論の出発点である。とすれば、この卦の大象王注も彖傳での議論を前提としているのである。

未済卦の場合、大象は「火在水上、未済。君子以慎辨物居方」と述べ、王弼は「辨物居方、令物各當其所也」と注す。大象後半部の「辨物居方」という君子の行動の結果、「物みなその所に当たる」という事態になる。この「物各當其所也」という表現は、彖傳に「雖不當位剛柔應也」と述べ王弼が「位不當、故未済。剛柔應、故可済」と注していることに関連づけることも可能ではある。未済の時は物みなその所に当たっていないから、君子は物みなその所に当たるようにさせるのである。しかし、些か無理もある。この卦に在っては、戸田氏が「訓詁義理の説明を加えているのみ」という事になるか。

以上九卦について分析を加えた。未済卦においては大象での議論と彖傳での議論が関係していないようであるが、残りの八卦においては、大象での議論が彖傳での議論を踏まえていることが確認できたと言えよう。

十一 乾・師・履・否・豫・觀・噬嗑・解・姤・升・震・巽・渙・節・小過

最後に、「キ」全然注を加えないもの。十五卦について検討する。王弼は大象に対して一字も注を施していない。大象を解釈する王弼の態度を直接に伺うことは出来ない。大象と象傳での議論との間に関連性が見出せるのであろうか。順次に検討を加えてみよう。

乾卦の場合、大象には「天行健、君子以自強不息」とあり、象傳の冒頭には「大哉乾元、萬物資始、乃統天。……」とある。象傳王弼注は「天也者、形之名也。健也者、用形者也。夫形也者、物之累也。有天之形、而能永保无虧、爲物之首、統之者、豈非至健哉……」と論じる。象傳には「天」に言及するのみで「健」には言及しない。大象以外には、乾卦文言傳に「大哉乾乎。剛健中正、純粹精也」とあるのみである。「天」と「健」とを関連づけて同時に論じる象傳王弼注の議論は、文言傳の「剛健中正」とよりは大象の「天行健」と深く関係しているはずである。

ただ、郭京『周易舉正』は、卦辭に対する孔穎達『正義』が「天者定體之名、乾者體用之稱」とあるのを根拠にして、象傳王注を「天也者、形之名也。乾也者、用形者也」というように、つまり「健」を「乾」に改めるのが正しいとする。⁹⁾樓宇烈氏は郭京の説を支持し、坤卦象傳の注に「地也者、形之名也。坤也者、用地者也。夫兩雄必爭、二主必危。有地之形、與剛健爲耦、而能永保无疆。用之者、不亦至順乎」とあるのは乾卦象傳での議論と同類であるから、坤卦象傳が「地」と「坤」とをセットにしているのに対して乾卦象傳も「天」と「乾」とをセットにするのが良く、郭京のように改めるのが正しいと賛意を表明している。¹⁰⁾

郭京の説に対し、徐芹庭氏は批判を加えて次のように指摘する。『周易注疏校勘記』に由る限り、「健」を「乾」に作るテキストは存在しない。象傳王注は後にも「至健」とあるように「健」について議論をしている。郭京が根拠にする孔穎達の言葉は卦辭に対する議論であつて議論の対象が異なる。象傳に対する孔穎達の議論はやはり「健」を問題にしている、と。徐芹庭氏の考えに従つて「健」が正しいとするのが妥当であろう。¹¹⁾

しかし、樓宇烈氏が指摘した点がまだ残っている。坤卦象傳王注の表現は確かに乾卦象傳王注の表現と対を成している。とすれば、何故に乾卦象傳注では「天也者、形之名也。健也者、用形者也」と言い、坤卦象傳では「地也者、形之名也。坤也者、用地者也」と言うのであろうか。徐芹庭氏の議論は郭京の説への批判であるから、この点についてはもちろん問題にしていないが、やはり氣に掛かる点である。些細な表現の差にすぎないと割り切ってしまうとそれまでである。だが、加賀栄二氏が指摘するように、上に引用した乾卦象傳注と坤卦象傳注の一对は、王弼

の易解釈の基本的姿勢を示す典型である。王弼もそれなりに表現に気を遣ったはずであろう。

では、樓宇烈氏が指摘する、乾卦象傳王注の表現と坤卦象傳王注の表現との間の不統一は、どのように説明されるのであろうか。

そもそも不統一と感じるのは、象傳王注の「天」「健」「地」「坤」の語を「説卦傳」の「乾、健也。坤、順也」「乾、天也。坤、地也」という説明とのみ関連づけて考えるからである（この点では郭京・樓宇烈・徐芹庭の三氏の態度は同じであると言える）。乾卦象傳注のように「天」と「健」をセットにするなら坤卦では「地」と「順」をセットにするのが良く、坤卦象傳注のように「地」と「坤」をセットにするなら乾卦では「天」と「乾」をセットにするのが良いはずである。では何故そのようにしないのか。それは、乾卦と坤卦の大象を見れば一目瞭然である。乾卦大象には「天行健、君子以自強不息」とあり、坤卦大象には「地勢坤。君子以厚德載物」とある。王弼は、乾・坤兩卦において大象を意識しているがゆえに、乾卦象傳注では「天」と「健」をセットにし、坤卦象傳注では「地」と「坤」をセットにしていると言えるであろう。

加賀榮二氏は上に引用した乾・坤兩卦象傳王注を解説して「すなわち王弼は易の首卦が天・地と名づけられずに乾・坤と名づけられているわけを、天地の形において見ず、天地の徳において見ようとし、かつその徳を、乾・坤の文字そのものから得ようとしたのである」と述べる。卦象ではなく卦徳を重んじるのは王弼易学の基本的姿勢である。乾卦大象は「天の運行は健であり、君子はこの健に見習って自強して息まず」と言う。天という卦象を挙げてはいるが、結局、卦徳「健」を重視した議論である。これは王弼の基本的姿勢と一致する。ゆえに王弼はこの大象の「天行健」を踏まえて自らの基本的姿勢を象傳注において論じたのであろう。ではなぜ大象注において議論しないのか。それは、彼の基本的姿勢を論じるという重要な項目であるがゆえに、王弼が重んじる象傳で議論を展開したのであろう（このことは坤卦においても同様である。ただ、坤卦大象は「地勢坤。君子以厚德載物」となっているために象傳注で「地」「坤」をセットにして議論を展開している。しかし、「地勢坤」という表現だけでは「坤」が卦徳であることが明瞭ではない。そこで、王弼はこの大象の表現に対して「地形不順、其勢順」と注することによって「坤」が卦徳の「順」であることを説明する必要があると感じたのであろう）。乾卦象傳注において、王弼は議論の過程で、大象の「天行健」を取り込もうとしていると言えるのではなからうか。

師卦の場合、大象は「地中有水、師、君子以容民畜衆」と述べる。一方、象傳には「師衆也、貞正也、能以衆正、可以王矣、剛中而應、行險而順、以此毒天下、而民從之、吉、又何咎矣」とある。象傳王弼注は「毒猶役也」と述べるだけである。しかし、卦辭「師、貞丈人、吉无咎」に対して王弼は「丈人、嚴莊之稱也。爲師之正、丈人乃吉也。典役動衆、无功罪也。故吉乃无咎也」と注している。これは明らかに象傳を踏ま

えた議論であろう。嚴莊なる丈人が師の正（長）であつてこそ、王となることができ、労役・戦役を起こして民衆を動員し、天下を使役しても民は従う。このような状況と民衆を受け容れ養う態度との間には、何の矛盾もない。むしろ民衆を受け容れ養う態度がなければ民衆は従わないはずである。確かに王弼は大象に関して何も述べていない。しかし、大象の「民衆を受け容れ養う」という主張は、象傳を踏まえた王注の議論においてはあまりにも当然な主張である。王弼にとつては、わざわざ言及していなくとも、象傳での議論の中に消化されているのではなからうか。

履卦の場合、大象は「上天下澤、履。君子以辯上下定民志」と述べる。象傳王注は象傳の冒頭の部分である「履柔履剛也、説而應乎乾、是以履虎尾不咥人亨」という表現に専ら注意を払っており、その議論は卦主である六三のことに集中する。これは、大象後半部の主張と全く関係しないと言える。ただ、象傳後半部に「剛中正、履帝位而不疚、光明也」とあり、王弼は「言五之德」と注している。剛健中正にして帝位を履み咎がないという存在と大象の「君子が上下を辯じて民志を定む」という主張との間に矛盾は生じない。大象後半部の主張は、少なくともこの部分の象傳の議論からは無理なく繋がっているとは言えよう。

否卦の場合、王弼は象傳や卦辭に対しても注をまったく施していない。王弼の大象に対する態度など論じるすべはない。ただ、次の点だけは確認しておきたい。大象には「天地不交、否。君子以儉德辟難、不可榮以祿」とあり、象傳には「否之匪人、不利君子貞、大往小來、則是天地不交而萬物不通也。上下不交而天下无邦也。内陰而外陽、内柔而外剛、内小人而外君子、小人道長、君子道消也」とある。象傳の「大往小來、則是天地不交而萬物不通也」は大象の「天地不交、否」を見事に説明しうる。また象傳の「不利君子貞」「小人道長、君子道消」というのは大象後半の「君子以儉德辟難、不可榮以祿」を見事に説明しうる。つまりこの卦においては、象傳の議論の中に大象の議論が取り込まれているとも言えるのである。

豫卦の場合も、王弼は卦辭・象傳・大象のどれに対しても一切注を施していない。大象は「雷出地奮、豫。先王以作樂崇德、殷薦之上帝、以配祖考」と述べ、象傳は「豫、剛應而志行、順以動、豫。豫、順以動、故天地如之而況建侯行師乎。天地以順動、故日月不過而四時不忒、聖人以順動、則刑罰清而民服豫之時義大矣哉」と述べる。否卦の場合とは異なり、大象の議論と象傳の議論が直接的には繋がらない。ただ、明らかに矛盾するということわけでもなからう。

觀卦の場合、大象は「風行地上、觀。先王以省方觀民設教」と述べる。王弼は卦辭「觀、盥而不薦、有孚顒」に対して「王道之可觀者、莫盛乎宗廟。宗廟之可觀者、莫盛於盥也。至薦、簡略不足復觀。故觀盥而不薦也。孔子曰、禘自既灌而往者、吾不欲觀之矣。盡夫觀盛、則下觀而

化矣。故觀至盥、則有孚頤若也」と注し、象傳「大觀在上。順而巽、中正以觀天下。觀盥而不薦、有孚頤若、下觀而化也。觀天之神道、而四時不忒。聖人以神道設教、而天下服矣」に対して「下賤而上貴也。統說觀之爲道、不以刑制使物、而以觀感化物者也。神則无形者也。不見天之使四時、而四時不忒、不見聖人使百姓、而百姓自服也」と注する。象傳王注は専ら象傳の「大觀在上」と「觀天之神道、而四時不忒。聖人以神道設教、而天下服矣」を解説しており、象傳「觀盥而不薦、有孚頤若、下觀而化也」に関しては、王弼は卦辭注で議論していることが解る。象傳・卦辭での議論は次のように要約できるのである。民を化するには刑罰法令を用いるのではなく、民が信じ威厳を感じるようなことを「觀（民に示し民が見る）」というようにすることによって感化するのが、觀卦においては正しい。このようにすれば、季節の巡りが天に違うことがないのと同じような自然なやり方で「教えを設ける」ことができ、天下の民は自ずから服従する。この議論は大象後半部の「先王以省方觀民設教」とそのまま繋がっていると言えよう。そもそも大象の「觀民設教」と象傳の「聖人以神道設教、而天下服矣」とは、民の服従を目指した「設教」を主張しているのである。つまり、大象後半部の主張は象傳での議論と一体化しうるのである。

ただ細かな点に注目すると、象傳・卦辭とその王弼注における「觀」は、為政者が民に示し、民に見せ、民に見られ、民が見る、という意味が主であろう。少なくとも「民を觀（み）る」という意味では使っていないと言える。一方、大象の「觀民設教」は「民に觀（しめ）して教えを設く」と読めなくはないが、「民の様子を觀（み）て教えを設ける」と解する方が妥当である。とすると、大象の「民を觀る」という考えは象傳に関する議論では直接的には何ら議論されていないことになる。

しかし、九五爻辭注を参考にすると状況は変化する。爻のレベルの議論を卦のレベルの議論に安易に結びつけてはならないのはもちろんのことである。だが、象傳の「中正以觀天下」というのは九五のことに他ならない。象傳での議論で民を感化するために教えを設ける為政者を象徴する存在がこの九五である。

九五爻辭「觀我生、君子无咎」に対して王弼は「居於尊位、爲觀之主、宣弘大化、光于四表、觀之極者也。上之化下、猶風之靡草、故觀民之俗、以察己道。百姓有罪、在予一人、君子風著、己乃无咎。上爲化主、將欲自觀、乃觀民也」と注する。この注は勿論、九五小象「觀我生、觀民也」を踏まえた議論である。しかし、爻辭と小象からは「上が下を感化する」と言う爻辭注の議論は直接的に出てくるはずがない。九五が觀卦の主であり、民に対する感化を進める主体である、と言う爻辭注の議論は、象傳での議論を前提にしているのは明らかである。そして、「上之化下……故觀民之俗」という爻辭注の議論は、直接的には九五小象の「民を觀る」を用いた議論であるにしても、大象の「民を觀る」という考

えに矛盾無く繋がっている。

以上の諸点を踏まえれば、この卦においても、象傳レベルの議論と大象後半部の主張とは無理なく繋がっていると云えるであろう。

噬嗑卦の場合、大象は「雷電、噬嗑。先王以明罰敕法」と述べる。一方、卦辭には「噬嗑、亨、利用獄」とあり、象傳は「頤中有物曰噬嗑。噬嗑而亨。剛柔分動而明、雷電合而章。柔得中而上行、雖不當位、利用獄也」と卦辭を説明する。そもそも象傳が上下卦徳とともに上下卦象「雷電」を用いて卦義を解こうとしている。また、卦辭と象傳の「獄を用うるに利あり」と言う議論は、大象後半部の「罰を明らかにして法を敕（整理し正す）する」という主張と無理なく繋がる。つまり、この卦においては、大象自体が象傳と一体化してしまっているとも言えよう。

王弼は象傳「剛柔分動而明、雷電合而章」に対して「剛柔分動、不溷乃明、雷電竝合、不亂乃章、皆利用獄之義」と注している。まず、王弼は大象と同じ上下卦象を用いて議論しており、これが象傳の考えに従ったものであることは明白であろう。そして、この議論で王弼注が謂わんとするのは、「溷亂しないからこそ明章であるのであって、それが『獄を用うるに利あり』の意味である」ということであろう。つまり「獄を用いる際には混乱せず明らかであることが重要である」ということである。これは大象後半部の「罰を明らかにして法を敕（整理し正す）する」という主張と関わっている。ただ、象傳と象傳注での議論では「刑罰・法令」の語は現れない。だが、卦辭注において王弼は次のように述べている。「噬嗑也。噬合也。凡物之不親、由有間也。物之不齊、由有過也。有間與過、齧而合之、所以通也。刑克以通、獄之利也。」「間を隔てているものに対して噛み合わせるという行為によって通じる」というこの卦辭注の議論は、象傳の前半部とそれに対する王注「頤中有物、齧而合之、噬嗑之義也。有物有間、不齧不合、无由亨也」を見ればわかるように、象傳での議論を踏まえたものである。ただ、卦辭王注の「刑克以通、獄之利也（刑罰でもって通じることができなのが、獄の利である）」という主張は、獄における刑罰の重要性に言及している。これは大象の「罰・法」と直接繋がるであろう。つまり、卦辭注に於いてではあるが、王弼は象傳レベルの議論の中で、大象を巧みに取り込んでいると言えるのではない。

解卦の場合、大象は「雷雨作、解。君子以赦過宥罪」と述べる。一方、象傳には「解、險以動、動而免乎險、解。解、利西南、往得衆也。其來復吉、乃得中也。有攸往夙吉、往有功也。天地解而雷雨作、雷雨作而百果草木皆甲坼。解之時大矣哉」とあり、王弼は「動乎險外、故謂之免、免險則解、故謂之解。天地否結、則雷雨不作、交通感散、雷雨乃作也。雷雨之作、則險厄者亨、否結者散故百果草木皆甲坼也……」と注する。象傳も象傳王注も最初に上下卦徳によって卦義を論じているが、その後に上下卦象「雷雨作」によって卦義を論じている。これは大象前半の「雷

雨作、解」とまったく同じ態度と言えよう。この点からすれば、結果として、象傳での議論において王弼は大象を象傳と一連のものとして議論していることになるのではないか。少なくとも両者が無理なく繋がっているとは言える。ただ、大象後半部の「君子以赦過宥罪」という主張は、象傳での議論に直接的には見えない。しかし、象傳王注に「雷雨之作、則險厄者亨」とある。これは、上下卦象を根拠として「險厄」が「亨」（同じく象傳注に「免險則解、故謂之解」とあるから、險厄が解消してこれから免れるのが亨ることであろう）と主張するものである。この主張は、大象が上下卦象を根拠にして「過を赦し罪を宥す」と主張するのと同じ発想であろう。また、確かに象傳での議論では「罪過」を直接に論じてはいないが、象傳での議論は「過を赦し罪を宥す」という主張と無理なく繋がるはずである。この卦においても、象傳での議論で大象を取り込もうとしている王弼の姿勢が見えるのではなからうか。

姤卦の場合、大象は「天下有風、姤。后以施命誥四方」と述べる。象傳には「姤遇也。柔遇剛也。勿用取女、不可與長也。天地相遇、品物咸章也。剛遇中正、天下大行也。姤之時義大矣哉」とあり、王弼は「施之於人、即女遇男也。一女而遇五男、爲壯至甚、故不可取也……」と注する。象傳と象傳注は爻の關係により卦義を論じようとしていることが解る。ただ、象傳「剛遇中正、天下大行也」に対して王弼は「化乃大行也」と注する。王弼の判断では「天下に教化・感化が行われる」ということになるであろう。ところで大象の主張は「天下に風が行き渡るように、命令を四方に行き渡らせる」ということであろう。命令を四方に行き渡らせることは、天下に教化・感化が行われることに他ならないであろう。さらに「論語」顔淵篇の「君子之德風也、小人之德草也、草上之風必偃」という周知の一節がある。「風」から教化・感化を連想するのはごく自然でもある。「化乃大行也」という王弼の言葉の中に、大象の主張を取り込もう、あるいは関連づけようとする姿を見ることが出来るのではないか。ただ注意しておきたいのは、王弼が大象を利用したとしても、大象の上下卦象をそのまま受け容れているのではないと言うことである。「天下に風が吹く」という卦象に関心を寄せているのではなく、「世の中に（天下）教化・感化が大に行われる」という、読み替えた結果に関心を寄せているのである。

升卦の場合、大象は「地中生木、升。君子以順德積小以高大」と述べる。象傳には「柔以時升。巽而順、剛中而應、是以大亨。用見大人、勿恤、有慶也、南征吉、志行也。」とあり、王弼はこれに対して「柔以其時、乃得升也。純柔則不能自升、剛亢則物不從。既以時升、又巽而順、剛中而應、以此而升、故得大亨。巽順以升、至于大明、志行之謂也」と注する。王弼の象傳での議論では「巽」は「したがう」の意味にほぼ近いであろう。つまり、王弼は「順」を升卦の卦義を論じる際の重要な要素と考えている。大象の「順德」は「順の德」と読むにしろ「德を順にす

る」と読むにしろ、「順」が重要な要素となる。象傳での王弼の議論は大象後半部の主張と無理なく繋がっている（陸德明『經典釋文』は一本に「順德」の「順」を「愼」に作るとする。王弼がもし「愼」が正しいとしていたのなら、この議論は成り立たない。）。

震卦の場合、大象は「洊雷、震。君子以恐懼脩省」と述べる。象傳には「震亨。震來虩虩、恐、致福也。笑言啞啞、後有則也。震驚百里、驚遠而懼、邇也……」とあり、王弼は「威震驚乎百里、則情者懼於近矣」と注す。さらに王弼はこの象傳での議論を踏まえて、卦辭「震來虩虩笑言啞啞」に対して「震之爲義、威至而後乃懼也。故曰震來虩虩、恐、懼之貌也、震者驚駭怠惰、以肅懈慢者也。故震來虩虩、恐、致福也。笑言啞啞、後有則也」と注する。象傳とそれを踏まえた王弼の議論には、恐懼によつて福がもたらされるという考えが読み取れる。そしてこの考えからは大象の「君子以恐懼脩省」という主張は無理なく展開しうる。つまり、象傳での王弼の議論と大象後半部の主張とはごく自然に繋がっていると言える。

巽卦の場合、大象は「隨風、巽。君子以申命行事」とのべる。王弼は、象傳「重巽以申命」に対して「命乃行也、未有不巽而命行也」と注し、これを踏まえて、卦辭「巽小亨」に対して「全以巽爲德、是以小亨也。上下皆巽、不違其令、命乃行也。故申命行事之時、上下不可以不巽也」と注している。そもそも大象の「申命行事」の主張が象傳の議論「重巽以申命」と同じものであるといえる。王弼の卦辭注での議論「申命行事之時、上下不可以不巽也」は大象を主な根拠としていると断ずることも不可能ではない。しかし、象傳を踏まえた議論の中に大象後半部の主張を巧みに読み込んだものと判断するのが穏当な解釈ではなからうか。

渙卦の場合、大象は「風行水上、渙。先王以享于帝、立廟」と述べる。卦辭には「渙亨。王假有廟、利涉大川、利貞」とあり、象傳には「渙亨、剛來而不窮、柔得位乎外而上同。王假有廟、王乃在中也……」とあって、王弼は象傳「王假有廟、王乃在中也」に対して「王乃在乎渙然之中、故至有廟也」と注している。大象後半部の主張と象傳での議論との間には、顕著な親和性を見ることが出来るであらう。つまり、無理なく繋がるのではないか。

節卦の場合、大象は「澤上有水、節。君子以制數度、議德行」と述べる。象傳には「節亨、剛柔分而剛得中。苦節不可貞、其道窮也。說以行險、當位以節、中正以通。天地節而四時成、節以制度、不傷財、不害民」とあり、王弼は象傳冒頭の一文に対して「坎陽而兌陰也、陽上而陰下、剛柔分也。剛柔分而不亂、剛得中而爲制、主節之義也。節之大者、莫若剛柔分、男女別也」と注する。大象の「制數度」は象傳の「節以制度」と深く関係するであらう。象傳での議論から大象後半部の主張に無理なく繋がるはずである。

小過卦の場合、大象は「山上有雷、小過。君子以行過乎恭、喪過乎哀、用過乎儉」と述べる。彖傳には「小過、小者過而亨也。過以利貞、與時行也。柔得中、是以小事吉也、剛失位而不中、是以不可大事也。有飛鳥之象焉。飛鳥遺之音、不宜上、宜下、大吉、上逆而下順也」とある。大象後半部の主張と彖傳の議論は直接的には関係しない。ただ、王弼は彖傳「過以利貞、與時行也」に対して「遇而得_レ以利貞、應時宜也、施_レ過於恭、儉、利貞者也」と注する。「過を恭儉に施す」という王弼の彖傳での議論は大象後半の「行いは恭に過ぎ……用は儉に過ぐ」という主張を巧みに取り込んだものといえるのではなからうか。

以上の十五卦の卦においては大象に王弼が注を施していないので、大象に対する彼の直接的な判断を窺うことが出来ない。それにもかかわらず多くの卦において、大象の主張が彖傳の議論と繋がっていたり、あるいは彖傳注や卦辭注などにおける王弼の議論の中に、大象の主張を巧みに読み込もうとする王弼の姿勢が窺えたりする、と言えよう。

十二 小結

第十章において検討した九卦の内の大半の卦において、大象における王弼の議論が彖傳での議論を踏まえている様子を確認できた。さらに、十一章において大象注が存在しない十五卦においても、大半の卦にあつて、大象の主張が彖傳での議論に通じていることを確認しえた。

十三 結語

六十四卦の全てについて分析を終えた。その過程で見えてきた王弼の大象に対する態度の特徴は、以下のようにまとめることが出来るであろう。大象の構造は、前半部つまり上下卦象によって卦名を導き出している部分と後半部つまり君子や上位者のあるべき姿を論じた部分とからできている。王弼は後半部をより重視しており、前半部をあまり重視していないと言える。これは従来から指摘されている王弼の卦象輕視の態度として確認しうる。

ただ、王弼は上下卦の關係を無視してしまっているのではない。大象が上下卦の關係を卦象によって示しているのに対して、王弼が大象の上下卦象の關係を上下卦徳の關係・陰卦陽卦の關係あるいは陰陽消長の關係などに読み替えてしまっている卦が、それなりに存在している。そしてこれらの読み替えは、王弼独自の判断ではなく、象傳の主張を用いたに過ぎない。また、王弼が上下卦象を用いて議論している例も存在する。しかしその場合も、象傳が上下卦象を用いているのに従っているか、あるいはその議論が象傳での議論と深く關係しているかのどちらかである、と言えるケースが大半である。つまり、王弼は象傳の立場から大象前半部を見つめているのである。象傳は卦象を用いる場合もあるが基本的に卦徳を重視する。とすれば、卦象輕視という王弼の大象に対する態度は、王弼が象傳の立場から大象を見ているからだとも言える。

王弼がより重視していると考えられる大象後半部について言えば、その議論の内容が象傳の議論の内容と必ずしも一致しない場合が多い。しかし、多くの卦において、大象の議論を象傳の議論に關連づけようとしているか、あるいは象傳の議論へ取り込もうとしている王弼の努力の跡が見える。この事実もやはり王弼が象傳の立場から大象後半部を見つめようとしていることを示していると言えよう。

そして、王弼が大象に注を施していない卦が十五も存在するのであるが、この場合も、象傳注・卦辭注において大象と關連づけようと努力している王弼の姿がうかがえると言える。大象に注を施していない卦が十五も存在することが即座に王弼の大象に対する無視や輕視の態度を示すものではない。

「象傳の立場から大象を読む」これが大象に対する王弼の基本的な態度であると言えよう。

注

- (1) 拙稿「大象に対する王弼易学の態度について」I「二〇一〇年九月（龍谷紀要）第三十二卷第一号」三十九頁
- (2) 戸田豊三郎『易経注釈史綱』風間書房 昭和四十三年 三三〇頁
- (3) 注(2) 所引書三三〇頁
- (4) 「乃」は「巧」に作るテキストがある。
- (5) 注(2) 所引書三三〇頁
- (6) 注(2) 所引書三三一頁
- (7) 无妄大象に「天下雷行、物與无妄。先王以茂對時育萬物」とある。「茂を以て時に對し萬物を育つ」という「時」はもちろん「卦時」に關係してくる。しかし、

大象に「時」が見えるのは、この一例だけである。一方、彖傳には「豫之時義大矣哉」「隨時之義大矣哉」「頤之時大矣哉」「大過之時大矣哉」「險之時用大矣哉」「睽之時用大矣哉」「蹇之時用大矣哉」「解之時大矣哉」「姤之時義大矣哉」「革之時大矣哉」「旅之時義大矣哉」とあり、さらに觀卦・遯卦・損卦・益卦・升卦・艮卦・豐卦・小過卦の彖傳などに「卦時」と関わる「時」が見える。「時」の字だけならば他の卦の彖傳にも見える。「時(卦時)」を問題にするのは、彖傳の特徴であつて、大象の特徴でないと見えよう。

- (8) 「革去故而鼎成新」というのは、「序卦傳」に「革物者莫若鼎、故受之以鼎」とあるから、これを踏まえていると言えなくはない。しかし、「故」「新」という概念は「序卦傳」の表現からは直接的には読み取れない。王弼の独自性と考えてよいであろう。「序卦傳」の韓康伯注は鼎卦主注に従った解釈とすべきであろう。

- (9) 徐芹庭 『周易舉正評述』 中国書店 二〇〇九年 二十一頁

- (10) 樓宇烈 『王弼集校釋』 中華書局 一九八〇年 二二二頁

- (11) 徐芹庭 『周易舉正評述』 中国書店 二〇〇九年 二十二～二十三頁

- (12) 加賀榮二 『中国古典解釈史』 勁草書房 昭和三十九年 二八六～二八九頁